

英国の近代ツーリズム (その1)

— 英国温泉地

平 林 美 都 子

Modern Tourism in England (1): Spas

HIRABAYASHI, Mitoko

英国の近代ツーリズム

近代ツーリズムは市民意識の成長と産業の発展とともに進展していった。13、14世紀の一般民衆の旅といえどもっぱら巡礼であった。こうした巡礼には宗教心だけでなく見聞や娯楽要素を含んでいたことは、チョーサーの『カンタベリー物語』(Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*, 1317) からわかる¹。社会生活が世俗化し始めるのは、ルネサンス期/宗教改革の頃からである。しかし「余暇」の概念が芽生えるのは、産業の発達により労働環境に変化が生じた産業革命後だといえよう。労働時間の減少が制度化され、「労働と余暇が「近代」社会での社会慣行のなかで区分化される」ようになったためである(John Urry 2)。さらに、市民意識の表出としては、ほぼ同時期に起こったアメリカの独立戦争(1776)とフランス革命(1789)が重要事件だった。市民の余暇の実現を後押しするのは産業面の発達だった。大量輸送を可能にした蒸気機関車の登場(1804年リチャード・トレヴィシック[Richard Trevithick, 1771-1833]による)、鉄道の開通(1825年DurhamのStockton=Darlington鉄道)、そして1845年にはトマス・クックの旅行代理店の登場によって、英国の大衆ツーリズムが本格的にはじまるのである。

こうした観光の大衆化が始まる前、上流・中産階級の間で温泉地での鉱泉治療、いわゆる湯治がさかんだった。温泉地の発展はやがて海浜の発展にその地位を譲り、海浜リゾートの大衆化が一気に進む。本稿では、大衆ツーリズムの前段階である温泉地に焦点を当て、その発展と衰退の様子を概観したい。

英国温泉地 Royal Tunbridge Wells

18世紀前後にはヨーロッパ各地で温泉が発展した。温泉を意味する英語の‘spa’はベルギー東部の町の名前である²。ここは鉱泉で有名な保養地で、この鉱泉によって病が治癒したことから、‘spa’は温泉地を意味するようになったと言う。別の説としては、「水で健康」を意味するラテン語‘*Salus Per Aquam*’の頭文字が温泉を意味するようになったとも言われている。英国のスパは、スカーバラ(Scarborough)、バース(Bath)、バクストン(Buxton)、ハロゲイト(Harrogate)、ロイヤル・レミントン・スパ(Royal Leamington Spa)、ロイヤル・

タンブリッジ・ウェルズ(Royal Tunbridge Well)などが知られている。温泉は社会的に特別な地位にいるもののみが訪れることができる特殊な場だった。なぜなら、そこに宿泊する場を持っているか借りることができる人だけが温泉に行くことができたからである (Urry 17)。

ロンドンから南東に位置するケント州のロイヤル・タンブリッジ・ウェルズの歴史は、17世紀に遡る³。「ロイヤル」の形容が明示しているように、この温泉と王室とのつながりは深い⁴。もっとも「ロイヤル」が付くのはずっと後のことである。温泉の発見は次のような経緯による。1606年、ジェームズ1世の廷臣だった第3代ノース男爵 (Dudley North 1581-1666) が第6代アバガヴェニー伯爵 (Edward Neville, Abergavenny, 1551-1622) の狩猟場エリッジ (Eridge) 近くで療養していた。体調の回復が思わしくないままロンドンへ帰る途中、ノース卿はケント州とサセックス州の境界あたりに偶然、泉を見つけた。彼は赤みがかった水を医者へ届けて調べさせたところ、そこには鉄分が多く含まれていることがわかった。ノース卿はその鉱泉を飲んで体調が回復した。鉱泉の効用が知られるようになると、タンブリッジ・ウェルズは一気にロンドンの王侯貴族らの間で有名になったと言う。

タンブリッジはアバガヴェニー卿の私有地であり、その後周辺は整地され、二つの井戸が掘られ、近くのトンブリッジ (Tonbridge) までの道路も整備された。タンブリッジの温泉の整備はされたものの、近隣に客のための宿泊地はまだ作られていなかった。1629年にチャールズ1世妃、ヘンリエッタ・マライア (Henrietta Maria, 1609-69) が鉱泉治療に数週間滞在したときには、テントを張って宿泊したという。ヘンリエッタ・マライア妃はまもなく、息子 (後のチャールズ2世) を産んだ。彼女は産後、体調の回復のために1630年、当地に6週間滞在した⁵。1632年、アシュフォード (Ashford) の医者ロドウィック・ロウジー (Lodwick Rowzee, 1590-1655) が論文『クィーンの泉』 (*The Queenes Welles*) を著したこともあり、タンブリッジ・ウェルズの鉱泉の効用は世間に認められるようになっていった⁶。

1632年になると鉱泉治療者のために男女別の休憩所ができ、さらに鉱泉を飲むシーズン中には物売りたちが商品を並べるようになる。王政復古後、チャールズ2世の時代、ショッピング、ボウリング、ダンスなどの娯楽施設が完備され、タンブリッジ・ウェルズは最も賑わいを見せた⁷。チャールズ2世の妃キャサリン・オヴ・ブラガンザ (Catherine of Braganza, 1662-1685)、ジェイムズ2世の二人の妃、アン・ハイド (Anne Hyde, 1638-71) とメアリ・ベアトリチェ (Mary Beatrice, 1658-1718)、そしてアン女王 (Queen Anne, 1665-1714) からも子が授かることを望んでタンブリッジ・ウェルズを訪れた。鉱泉には婦人病、とりわけ不妊の治療に効果があると信じられていたのである。

タンブリッジ・ウェルズはロンドンに近いことから、17世紀にはエプソム (Epsom)⁸ ともども発展した。王室以外の著名人としては、1652年に日記作者ジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706)、またサミュエル・ピープス (Samuel Pepys, 1633-1703)、小説家デフォー (Daniel Defoe, 1659-1731) からも訪れた。1700年になると瓦を敷いた独特の遊歩道パンティール (Pantiles) が作られ、近くに宿ができるなど、街の整備も進んでいく。1708年には冷

水浴場が作られ、集会場、二つの図書室、劇場も整った。

ハノーヴァー朝になると、ジョージ2世がプリンス・オヴ・ウェールズの時代、二度にわたってタンブリッジ・ウェルズを訪れた。彼の気前良さは格別だったようだ。同時期にタンブリッジ・ウェルズを訪問していたデフォーは、プリンスのおかげで多くの貴族や上流階級もこの温泉にやってくるようになったと記している。

当時、温泉地バースに、「バースの王」(the King of Bath)の威名を持つ儀典長(Master of Ceremonies)リチャード・ナッシュ(Richard Nash, 1674-1761)がいた⁹。当時のバースは、王室一行や宮廷人、上流階級の人々が訪れる、いわゆる第一級の温泉地だった。そのために、訪問客の歓迎行事だけでなく、街全体をリゾート地として快適な場にする必要があった。その総責任者が儀典長という職だった。ナッシュが1732年からタンブリッジ・ウェルズでも儀典長を務めることになると、この温泉は治療の場としてだけでなく、社交場としても有名になっていった。ナッシュはバース同様タンブリッジ・ウェルズにおいても、訪問客に対して品位と作法を求める規則を作った。社交の場ではブーツやエプロン姿を禁じ、ダンス・パーティが始まる前に到着することや掃除人に1シリングのチップを支払うことまで記し、娯楽地となったタンブリッジに秩序を保とうとしたのである。

1779年にはタンブリッジ・ウェルズからロンドンまで定期的なコーチ・サービスも始まり、さらに便利になってきた。しかし王室や上流階級の人々の娯楽地としての温泉は、凋落の兆しがこのころから始まった。実際、ジョージ3世がタンブリッジ・ウェルズを訪れることはなかったし、息子のジョージ(後のジョージ4世)は二度タンブリッジを訪れてはいるものの、海浜のブライトンをいっそう好んでいたことがよく知られている¹⁰。

ヴィクトリア朝になるとタンブリッジ・ウェルズは新たな変化の段階を迎える。1829年代から30年代、富裕な不動産業者ジョン・ウォード(John Ward, J.P, 1776-1855)が当地のカルヴァリー地域(Calverley)を買い上げ、建築家のデシマス・バートン(Decimus Burton, 1800-81)とともにこの地域の開発を進めた¹¹。1826年から1828年、さらに1834年にはケント公爵夫人と娘ヴィクトリア(Alexandrina Victoria, 1819-1901. 後のヴィクトリア女王)がカルヴァリー地域に家を借り、休暇を過ごした。1845年に鉄道が開通すると宅地開発はさらに進んだ。1821年に2000人ほどだった人口が、1901年には33,000人にも増加していった。人々がかつてのようにダンスやギャンブルといった娯楽目当てではなく、風景と静寂を楽しむためにタンブリッジ・ウェルズを訪れるようになったのである。

タンブリッジ・ウェルズは19世紀のイギリス文学と関係が深い。アルフレッド・テニスン(Alfred Tennyson, 1809-92)の家族は1841年からタンブリッジ・ウェルズに住んでいた。オスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)の戯曲『真面目が肝心』(*The Importance of Being Earnest*, 1895)では、ジャックの叔母のセシリー(Cecily)が住んでいることになっている。フォースター(E. M. Forster, 1879-1970)は少年時代、近くのタンブリッジに住み、そこのパブリック・スクールに通っていた。小説『眺めの良い部屋』(*A Room with a View*)

では、主人公のルーシーがタンブリッジ・ウェルズに以前住んでいたという設定になっている。また A.A.ミルン (Milne, 1882-1956) は8歳のとき、「三日間のハイキング」(A walking tour of Sussex and Ashdown Forest) という作文の中で、タンブリッジ・ウェルズの宿に1泊したことを記している。

1909年、タンブリッジ・ウェルズにこれまで数々の英国王室の人々が訪れたことを評価して、エドワード7世(Edward VII, 1841-1910)が「ロイヤル」の接頭辞を付ける事を許可した。ロイヤル・タンブリッジ・ウェルズはこうして誕生したのである。

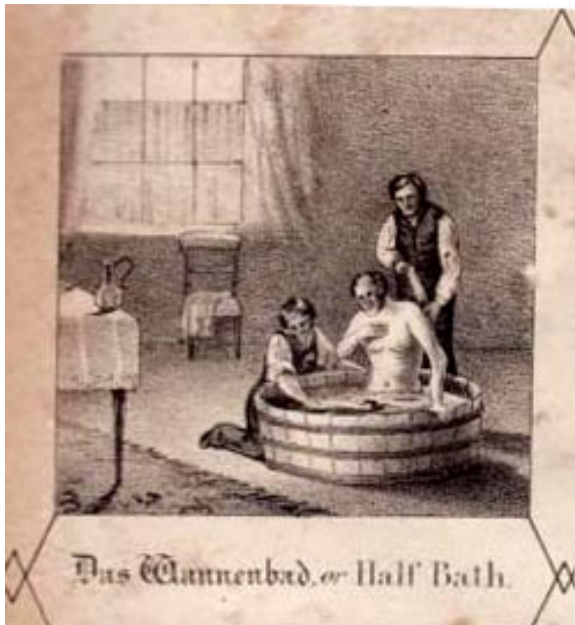
水治療

イギリスにおいて温泉治療は水浴とともに鉱泉を「飲む」ことを意味した。水浴は必ずしも温かい湯というわけではなく、冷水による治療も存在した。もっとも、イギリスでは従来、水浴に関してモラルの面からの拒否反応が根強かった。教会は15世紀、裸体での水浴を禁止していたし、16世紀にはケンブリッジ大学の学生が川で水浴すると、最初は鞭打ちの罰、二度目になると退学させられるほどだった¹²。

ジョン・フロイヤー (John Floyer, 1649-1734) はレディング(Reading)南西のリッチフィールド (Litchfield) の内科医で、冷水浴の唱道者として知られている。1702年、彼は『冷水の歴史』(*Phychorolousia, or the History of Cold Bathing*) を著し、熱性疾患の治療法を論じた。1797年にはリヴァープールの内科医ジェイムズ・カーリー (James Currie, 1756-1805) が、『水の効用についての医学的報告書』(*Medical Reports, on the Effects of Water, Cold and Warm, as a remedy in Fever and Other diseases, Whether applied to the Surface of the body or used Internally*) と題する書物を発表し、一般的な水治療として、冷水、温水の飲用、および冷水浴、温浴などがさまざまな心身の病の治療に効果的であると主張した¹³。

カーリーの論文はドイツ語に翻訳された。ドイツで水治療が流行りだしたころ、シレジア出身の農夫ヴィンツェンツ・プリースニツ (Vincent Priessnitz, 1799-1851) は独自の水治療、ハイドロパシー (hydropathy) を始めた。彼も冷水を飲用と外用、すなわち、全身浴、シャワー、冷湿布、発汗用に利用した。プリースニツによれば、病気は身体の中に有害物質が蓄積しているためだということである¹⁴。彼は薬物を使用する代わりに、身体が極限状態 (発熱や発疹や化膿などクリーゼと呼ばれる状態) になるまで入浴をしたり湿布を用いたりする治療を提唱した (図1~6)¹⁵。その効果が世界各地に広まると、1840年代、クラリッジ (R. T. Claridge 1797-1857) はハイドロパシー治療をイギリスに導入した¹⁶。そしてウィリアム・ウィルソン (William J.E Wilson, 1809-84)、ジェイムズ・ガリー (James M. Gully, 1808-83)、エドワード・ジョンソン (Edward Johnson) らがその治療法を継承した。ウィルソンとガリーは共同でバーミンガム郊外のモールヴァーン (Malvern) に治療施設をつくった。チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82)、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70)、フローレンス・ナイティンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910)、そしてア

ルフレッド・テニスン (Tennyson) から当時の著名人もこの治療を受けた¹⁷。



(図1 半身浴)



(図2 ヘッド・バス)



(図3 坐浴)



(図4 灌水浴)



(図5 発汗)



(図6 発汗後 入浴)

海の効用と海浜行楽地

ルイス (Lewes) 出身の医師リチャード・ラッセル (Richard Russell, 1687-1759) は海辺に住む子どもたちには皮膚病、腺病、くる病を患っている子が少ないことに気がついた。1750年、彼は腺病に対する海水浴・海水飲用療法の効用について、『腺の疾病について』(*De Tabæ Glandulari*. 1752年に *Dissertation on the Use of Sea Water in the Diseases of the Glands, particularly the Scurvy, Jaundice, King's Evil, Leprosy, and the Glandular Consumption* として英訳される) という論文を発表した。ラッセルはブライトン

(Brighton が省略されて Brighton となる) に居を据え、この海浜を宣伝した。海浜での病気療養は、海風、水浴、海水を飲むことの三種類だが、なかでも海水を飲むことの有効性がとくに強調され、1日に3~4回海辺に行って1パイント(0.57リットル)の海水を飲むよう、処方された。

しかしこうした海水の飲用は次第に推奨されなくなり、療養はもっぱら海風と海水浴に限定されるようになっていった。海風や水浴が病後の回復や肺疾患に有効だと言う医者のお墨付きが、海浜行楽地の発展に大きく貢献するようになったのである。

海浜行楽地としては、温泉地でもあるスカーバラが1730年頃より人気があった。1735年には水浴馬車(Bathing Machine)がこの地に登場した。水浴馬車とは更衣室を備えた馬車のことである。泳ぐ人はこれに乗り込んで着替えをし、馬車ごと馬に引かれて沖に出て行き、馬車の階段を下りて海水に入った。ベンジャミン・ビール(Benjamin Beale)が発明したビール式水浴馬車がマーゲート(Margate)に最初に登場したのは1754年である。ビールの水浴馬車には水際まで張りだして周囲を覆う大きな帆布がついていて、海辺から水浴姿を見られる危険はなかった。さらに男女が泳ぐ時間帯が決められ、別々の馬車に乗り込んで海に出て行って泳ぐのだった。

18世紀の半ば、ブライトンにはすでに多くのテラス・ハウスが建設され、1769年には最初の海水浴場が作られた。先に挙げたリチャード・ラッセルは医学的立場からブライトンを宣伝したが、行楽地としての名を広めたのは、この地に異国情緒あふれる宮殿を作ったウェールズ王子、後のジョージ4世である。1787年からロイヤル・パヴィリオン¹⁸の建設が始まり、まもなくバースやタンブリッジ・ウェルズを凌ぐ社交の場となっていった。こうした海浜行楽地も、当初は温泉街のやり方にならい、社交会館やダンス場、音楽コンサートなどの娯楽が用意されていた。ブライトンでもバースやタンブリッジ・ウェルズのやり方を真似、娯楽場を取り仕切る儀典長は新来者を迎えるために鐘を鳴らしたりしていた。

鉄道の発達と海浜行楽地

18世紀中葉からバース、エプソム、タンブリッジ・ウェルズなどの温泉地は徐々に衰退しはじめる。その理由の一つが意外にも交通の発達だった。1784年、ロンドンとバース間に郵便馬車(mail coach)が登場し、バースへ旅する人が一気に増えた。これはバースがさらに繁栄するきっかけのように見えるが、実はそうではなかった。交通の便が良くなり観光客の大衆化が始まると、バースを訪れる人の質がすっかり変わってしまったのである。そもそもバースやタンブリッジ・ウェルズは温泉地であると同時に、上流階級の人々にとりロンドンを離れた社交の場でもあった。ところが成りあがりの大衆が押しかけるようになると、バースがもはや優雅な社交地であり続けることは不可能になってしまった¹⁸。その結果、それまでの常連だった上流階級の人々は海浜保養地へ向かうことになったのである。

19世紀の行楽地は、このように温泉場から海浜へと移っていった。一般に上流階級の流行

は下の階級へと伝播するものである。ブライトンやウェイマス(Weymouth)¹⁹ など、王室や上流階級の人々が訪れる海濱行楽地は、やがてその下の階層の人気場所となっていった。1841年にはロンドンとブライトンをつなぐ鉄道が開通すると、ブライトンへの日帰り旅行が可能になった。1861年には1日に3万人もの行楽客がブライトンへやって来たと言う²⁰。ちなみに開通前の1837年には1年間の行楽客が5万人だったそうだ²¹。鉄道の発達は結果として大衆ツーリズムを加速させることになる。ピムロットは海濱行楽地と温泉地の違いを次のように説明している。

温泉地の繁栄は限られた数の鉱泉を独占することにあつた。温泉地は商業や産業の拡大によって増大する需要には不十分だった。一方で、海濱行楽地の収容能力は無限であつた。温泉地での社交生活が休憩室と浴室に集中して、公での生活に対処する十分な代替物がないのに対し、海岸は広大で訪問客をすべて収容でき、社会的な均一性などはほとんど問題にならなかつた (Pimlott 55)。

こうして19世紀中葉には「海濱行楽地間に社会的色調の違い」(Urry 21)が鮮明になっていく。すなわち、ブライトンに中産階級が殺到するようになり大衆化していくと、上層の富裕層はロンドンからさらに遠いデヴォン、コーンウォール、ペンブルックシャー(ウェールズ)の海岸へと移動していくことになるのである。ヴィクトリア朝に都市化が加速する中で、海濱行楽地の発展はめざましいものだった。海濱行楽地については稿を改めたい。

注

1. 聖トマス(ベケット)を詣でるためカンタベリーまでの道中、道連れとなった旅人たちが面白い話を競い合う物語。
2. ベルギーのLiège地方の都市で、14世紀から温泉が出た。
3. タンブリッジ・ウェルズの歴史については、P. J. Corfield, *The Impact of English Towns, 1700-1800*; Chris Jones, *By Royal Appointment*; Lewis Melville, *Society at Royal Tunbridge Wells in Eighteenth Century, and After*; Reginald Lennard ed, *Englishmen at Rest and Play*の1章(“The Watering Places”); J. A. Pimlott, *The Englishman's Holiday: A Social History*の1章(“Beginnings”)を参考にした。
4. タンブリッジ・ウェルズとイギリス王家との関係については、とくに Chris Jones, *By Royal Appointment*と Reginald Lennard ed, *Englishmen at Rest and Play*を参考にした。
5. ヘンリエッタ・マライア妃は不妊治療として Northampton 近くの Wellingborough の温泉にも1627年、1628年に滞在している。Lennard, 21.
6. 彼は一日に鉱泉2~10パイントの飲むことを推奨した。1パイント(pint)は0.57リットル。
7. Lennard, 55.
8. サリー州にあり、ロンドンから30キロほどに位置する。エプソムの温泉が発見されたのは1618年。

温泉の歴史については <http://www.epsomandewellhistoryexplorer.org.uk/EpsomSpa.html> 参照のこと。
エプソムはまた競馬のダービーで知られている。

9. 温泉地バースについては、Lewis Melville, *Bath under Beau Nash*, 小林章夫『地上楽園バースーリゾート都市の誕生』を参照。
10. 1788年にジョージ三世は精神錯乱の発作を起こし、チェルトナム (Cheltenham) 温泉場に5週間滞在し、鉱泉を飲用する治療をした。
11. Calverley New Town に関しては <http://www.tunbridgewellsmuseum.org/default.aspx?page=1627> 参照のこと。
12. Pimlott, 50; Lennard, 68.
13. James Currie, "Medical Reports, on the Effects of Water, Cold and Warm, as a Remedy in Fever and Other Diseases, Whether Applied to the Surface of the Body or Used Internally."
14. 『世界温泉文化史』197.
15. 図1~6はシレジアのグレーフェンベルクにおけるブリースニツの治療の様子。Claridgeの本より(画像はPublic Domain. http://en.wikipedia.org/wiki/File:Hydropathic_applications_at_Graefenberg_per_Claridge%27s_Hydropathy_book.jpg から。)
16. *The Cold Water Cure* を1842年に出版した。
17. テニスンはブリースニツの甥が治療するプレストベリー (Prestbury、Manchesterの南部の町)の施設で水治療(ハイドロパシー)を受けた(1844年)。本来、ハイドロパシーは身体の病気を対象にしていて精神の病は受け付けなかったが、心気症だけは治療対象だった。このときテニスンの病が遺传的な強硬症あるいは癲癇^{カタレプシー}だったのかどうかははっきりしていない。その後も鬱がひどくなると、彼は各地の施設で水治療を受けた。ガリー医師の治療を受けたのは1848年である (Robert Bernard Martin, 277-280, 315-316)。
18. ジョン・アーリーは2章で、行楽地の「階級制」が発展すると「ある場所は大衆観光の典型とみなされ、軽蔑されたり笑われたりする」と指摘している(16)。
19. イングランド南部。1789年ジョージ三世はここではじめて海水浴をした。
20. John Lowerson & John Myerscough, *Time to Spare in Victorian England*, 31.
21. Pimlott, 76.

文献

- Corfield, P. J. *The Impact of English Towns, 1700-1800*. Oxford: Oxford University Press, 1982.
- Currie, James. "Medical Reports, on the Effects of Water, Cold and Warm, as a Remedy in Fever and Other Diseases, Whether Applied to the Surface of the Body or Used Internally." the Fifth Edition, 1805. 30 September 2010 <<http://www.archive.org/stream/medicalreportso00currigoog#page/n7/mode/1up>>.
- Jones, Chris. *By Royal Appointment: Why do they call it Royal Tunbridge Wells?* Royal Tunbridge Wells Civic Society, 2009.
- Lennard, Reginald, ed. *Englishmen at Rest & Play: Some Phases of English Leisure, 1658-1714*. Oxford: Clarendon Press, 1931.
- Lowerson, John, & John Myerscough. *Time to Spare in Victorian England*. Hassocks, Sussex: The Harvester Press, 1977.

- Martin, Robert Bernard. *Tennyson: The Unquiet Heart*. Oxford: Clarendon Press, 1983.
- Melville Lewis. *Society at Royal Tunbridge Wells: In the Eighteenth Century and After*. London: Eveleigh Nash, 1912. Tokyo: Athena Press, 2006.
- . *Bath under Beau Nash*. London: Eveleigh Nash, 1907. Tokyo: Athena Press, 2006.
- Pimlott, J. A. *The Englishman's Holiday: A Social History*. 1947, rpt. Hassocks, Sussex: The Harvester Press, 1976.
- Urry, John. *The tourist gaze: leisure and travel in contemporary societies*. London: Sage, 1990.
- ウラディミール、クリチェク 『世界温泉文化史』 種村季弘、高木万里子訳、国文社、1994.
- 小林章夫 『地上楽園バースリゾート都市の誕生』 岩波書店、1989.
- “Tunbridge Wells.” 1 October 2010 <<http://www.tunbridgewellsmuseum.org/default.aspx?page=1627>>.
- “Epsom Spa.” 8 October 2010 <<http://www.epsomandewellhistoryexplorer.org.uk/EpsomSpa.html>>
- “Hydropathic applications.” 12 October 2010 <http://en.wikipedia.org/wiki/File:Hydropathic_applications_at_Graefenberg_per_Claridge%27s_Hydropathy_book.jpg>